



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3617 号 2017.4.25 発行

障害者の優しい接客好評 「食事処かささぎ」 8周年 貴重な社会参画、就労の場
佐賀新聞 2017年04月25日



「食事処かささぎ」で働く従業員ら＝佐賀市役所 8周年イベントで手作りクッキーを配るスタッフ＝佐賀市役所のかささぎ食堂 知的障害



のある人たちが働く施設「食事処かささぎ」のオープン 8周年を祝うイベントが24日から始まった。佐賀市役所の地下にある同食堂は、接客対応がいいと評判で市の職員や一般客も利用する。24日は利用者に手作りクッキーをプレゼントした。

この日は、スタッフが「また来てください」などのメッセージが書かれた手作りのクッキーを先着250人に手渡した。イベントは28日までで、400円以上のメニューを注文する利用者にホットコーヒーを無料で提供する。

メニューは約25種類あり、1日約70食を提供する390円の日替わりランチ「サンキュー定食」や鉄板ハンバーグの「ゴーゴーランチ」が人気だという。月に2～3回利用するという男性（91）は「接客の対応が気持ちよく、元気をもらえる。障害者が一緒に働ける制度は良い」と笑顔で話した。

同施設は知的障害者授産施設「かささぎの里」が2009年から運営し、レジ打ちや配膳などを行う知的障害者8人と同施設の職員6人が働く。同施設の鳥越景行施設長（44）は「障害者が働く場所が少ない現状があり、就労の場が増えればと運営を開始した。経済面で自立して、障害者の社会参画につなげたい」と話した。

愛知) 小牧ワイナリー開設2年 新作の売れ行きも好調 本間久志

朝日新聞 2017年4月25日

障害のある人たちが栽培したブドウでワインを醸造、販売する「小牧ワイナリー」（小牧市野口）が、開設から2年を迎えた。3月に発売した新作ワイン「小牧城信長」の売れ行きも好調で、今月末の「春の葡萄（ぶどう）酒まつり」では新酒が販売される。

ワイナリーは社会福祉法人「A J U自立の家」（名古屋市昭和区）が、障害者の自立を目的に2015年4月に開設した。現在、小牧や春日井、名古屋市などの障害のある10～

50代の男女3人と、スタッフ1人がワイン造りや販売、併設のカフェで働く。春の水やりから夏場の草取り、8、9月の収穫、冬場の枝の手入れなど1年を通じて障害がある人たちもワイン造りに携わっている。



小牧ワイナリーの醸造設備を点検する白井尚さん＝小牧市野口

開設から1年が経った昨年4月、前年に自前の畑で収穫したブドウと国内から

仕入れたブドウを使ったワイン「ななつぼし2015」(赤、白)を発売。さらに今年3月10日には地元になんだ「小牧城信長」(赤、白)を出した。



金沢大、福祉法人の佛子園と包括協定 医療・福祉で共同研究

日本経済新聞 2017年4月25日

金沢大学は24日、社会福祉法人の佛子園(石川県白山市)と包括連携協定を結んだ。同法人は高齢者や障害者、学生が混住する多世代共生型の福祉施設「シェア金沢」の運営で知られる。医療や街づくりなど多様な分野で教育や研究の連携を深める。

金沢大と佛子園は2016年度から、地域づくりを学ぶ学生のインターンシップ(就業体験)をシェア金沢で実施している。学生が課外活動で朗読会などのイベントを企画するなど、協力が進んでいる。

今回の協定締結を機に、予防医学の分野でも連携を広げる。金沢大が医学生や医師を派遣するなどして、シェア金沢の取り組みが入居者の心身の健康維持にどう結びついているかを科学的に実証する。

佛子園は金沢大の知見を介護などに生かす。将来的には研究成果を福祉の先進モデルとして、日本全国や世界に発信することを視野に入れる。

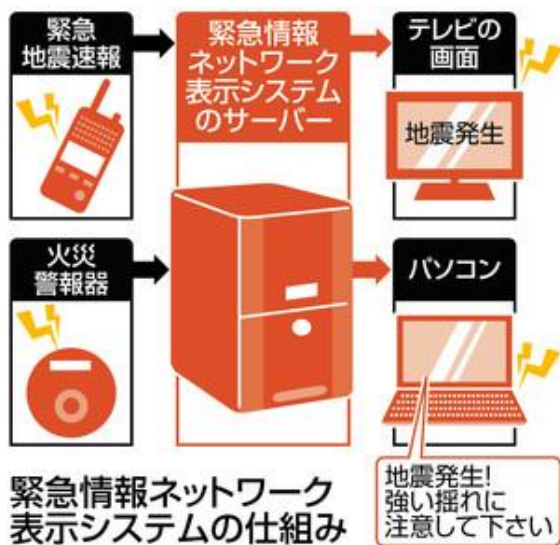
緊急システム、全国に普及 津の企業が開発、発明大賞功労賞も

中日新聞 2017年4月25日

津市あかつ台のコンピューター関連会社「イー・ダブリュ・エス」の開発した緊急情報ネットワーク表示システムが、第四十二回発明大賞(日本発明振興協会主催)の考案功労賞に県内で初めて選ばれた。災害情報を瞬時に伝えるシステムで、既に県内外の工場や学校などで導入されている。

緊急情報ネットワーク表示システムは、三重大学大学院工学研究科の川口淳准教授＝システム工学＝と協力し、同社社長の中村里美さん(55)が二〇〇六年三月に開発した。

サーバーが津波警報や緊急地震速報を検知すると、テレビやパソコンの液晶画面に、災害の発生を知らせる画像を表示したり、音



声を流したりする仕組み。防犯センサーや火災警報器と連動することもでき、施設の安心・安全の向上にも役立てる。

開発のきっかけは〇一年六月に大阪教育大付属池田小で起きた児童殺傷事件。松阪市内の幼稚園から事件の後、不審者から身を守る技術の開発を頼まれた同社は一二年二月に特許を取得。東京都内で展示会に出品したところ、建設会社を中心に評判が広がり、工場や学校など全国百カ所ほどで利用されるようになった。



中村さん（右）が開発した画像と音声で緊急情報を伝えるシステムの一部＝津市あいつのコンピュータ関連会社「イー・ダブリュ・エス」で

システムは障害者や外国人にも情報を視覚的に伝えられることから、昨年二月には大阪府の聴覚支援学校でも採用され、現在は都内の大手ホテルも導入を検討しているという。

中村さんは「今後はシステムの改良を進めるとともに、地下街やコンサートホールなど、ありとあらゆる場所の危機管理に対応できるようにしたい」と話している。（大島宏一郎）

「やまゆり園」入所者の転居完了 寂しさ、不安…横浜で新生活始まる

産経新聞 2017年4月25日

入所者19人が刺殺されるなどした相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で、事件後も利用を続けていた入所者らの仮移転先への転居が完了した。やまゆり園は、取り壊しは決まっているものの、同じ場所で建て替えられるかどうかは不透明な状況。近隣住民からは「寂しい」「また戻ってきて」と別れを惜しむ声が相次いだ。慣れない環境に不安も募るなか、入所者らの新生活が始まった。（河野光汰）

◆思い出の場所

入所者の高月淳子さん（61）の親類である野崎裕子さん（61）は、今月初め、やまゆり園で高月さんと交わした会話が印象に残っている。仮移転先の「津久井やまゆり園芹が谷園舎」（横浜市港南区）への引っ越しに向け、荷造りが一段落したころ。いつもより片付いた部屋で、声をかけた。

「淳子さん、もうすぐ移らなきゃいけないね」

「うん…」

高月さんは弱々しくうなずいた。枕元に最後まで置いてあったお気に入りのぬいぐるみが、愛着のある施設への思いの深さを物語っているように思えたという。

野崎さんは「彼女にとっては思い出が詰まった場所。寂しい気持ちがあったと思う」とおもんばかり。

園の近くに住まいがある野崎さん自身にとっても、やまゆり園は幼いときから身近な存在だった。「入所者の方と焼き物を一緒に作ったり、お祭りに行ったり。地域で育った人なら誰でも同じような経験がある」と振り返る。

◆ヒアリング実施へ

やまゆり園は県立施設として昭和39年に開園。多くの地域住民が職員に雇用され、周辺にはいまだに元職員が多く住んでいる。開園の翌年に、当時の相模湖町主催で行われた成人式に、成人の入所者が出席するなど、早くから地域に受け入れられてきた。

ただ現状では、元の場所に同規模の障害者施設が建つかどうかは分からない。

県は当初、平成32年度までに建て替え完了を予定していたが、障害者団体などから地域の小規模施設に入所者を移すべきだとの意見が相次ぎ、建て替えの是非を再検討している。

入所者から直接、意見を聞き取るべく、園の元職員や各自治体の障害福祉担当からなる「意思決定支援チーム」の編成も決定。元の場所に戻りたいか、別施設に移りたいかなどのヒアリングを今後、入所者に対して行う方針だ。

園の警備員だった杉本寿さん（68）は「入所者が戻ってきたら、地域の人間としてもっと交流をしたい」。別施設への再就職も一時検討したが、やめたという。

◆適応には時間も…

仮移転先の芹が谷園舎では、やまゆり園での生活スタイルを踏襲するべく、建物のリフォームなどを済ませた。入所者は、以前と同様に十数人程度の「ホーム」と呼ばれるグループに分かれて生活し、就寝時などには個室を利用できる。園舎での生活は約4年間が予定されている。

一方で、山間ののどかな場所にあったやまゆり園とは違い、周辺の交通量など周囲の環境には大きな違いがある。入所者家族からは「適応するには時間がかかるだろう」と不安の声も上がる。

入所者約110人の転居は今年21日に完了。翌22日には転居後初めて家族会が開かれ、今後の生活について説明などがあつた。

津久井やまゆり園を運営する社会福祉法人「かながわ共同会」の米山勝彦理事長は「芹が谷の地を『新しい暮らしの場』として、一日も早く安定した生活を送っていただきたい」、全力で取り組んでいきたい」と話した。

【用語解説】相模原殺傷事件

昨年7月26日、相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で、入所者が次々と刃物で刺され、19人が死亡、職員2人を含む26人が負傷した事件。県警は殺人や殺人未遂容疑などで元施設職員、植松聖（さとし）被告（27）を逮捕、追送検し、横浜地検は昨年9月21日から今年2月20日まで5カ月間の鑑定留置を実施して、刑事責任能力があるとの精神鑑定結果が出たことから同月24日、殺人罪などで起訴した。

<新聞で新聞を作る>「第14回新聞切り抜き作品コンクール」より 高校の部・優秀賞 東京・多摩大付属聖ヶ丘高 東京新聞 2017年4月25日



「弱者狙い『許せぬ』」、という紙面左上の大きな白抜き文字が目目を引く。相模原市で発生した障害者施設の殺傷事件の見出しで、記事本文とは別に切り抜き、読み手にインパクトを与えている。右上には「ばいきんあつかい いつもつらかった」「福島の人はいじめられるとおもった」。福島原発の事故で福

島県から横浜市に避難、小学生時代にいじめを受けた男子中学生の手記などの記事だ。

テーマは差別のない共生社会の実現だ。二つの事件を柱にすえ、下段部にはトランプ米大統領が就任前、障害がある記者のまねをしたという記事なども掲載。一方、鉄道会社の改良型駅ホームドア実証実験の記事といったバリアフリー社会推進に向けた前向きな話題も取り上げた。

一年（昨年度）田村瑠菜（るな）さんは横浜市のいじめについてこうコメントする。「（担任の）教師は原発の恐ろしさや家を離れなければならない苦しみを生徒に教えるチャンスだったのではないか」「少しのずれで起きてしまういじめにどう対処して行くか。私はそれを課題にしていこうと思う」

東京新聞・第十五回新聞切り抜き作品コンクールの作品を募集します。関東の小・中・高校生が対象です。詳しくは東京新聞のホームページ（教育）をご覧ください。

地産地消推進で滑川市 1店舗、2団体認定

中日新聞 2017年4月25日



「なめりかわ地産地消推進の店・団体」の認定先の代表者＝滑川市役所で

地産地消を後押ししようと、滑川市は「なめりかわ地産地消推進の店・団体」として市内の一店舗二団体を新たに認定した。二〇一四年度から始まった取り組みで、認定先は今回を含め三店舗七団体。それぞれ、店舗や事務所に特製の木製看板が掲げられる。

認定されたのは西部営農組合（魚躬）、あすなる●楽部、農産物直売所&カフェとみや（上小泉）。西部営農組合は兼業農家を中心にコメやサトイモ、ジャガイモなどを栽培。あすなる●楽部は障害者の就労

事業として、サトイモやジャガイモ、タマネギなどを育てている。とみやは地元産食材で料理を提供している。

いずれも市の募集に応じ、市や飲食店などでつくる審査会で選ばれた。

市役所で認定式があり、上田昌孝市長がそれぞれの代表者に看板を手渡した。西部営農組合の高田茂之監事は「若い人たちと協力しながら気を引き締めて頑張りたい」と述べた。（山本真士）

虐待問題対応の弁護士 児童相談所に配置を

NHK ニュース 2017年4月25日

虐待の問題に対応する弁護士を児童相談所に配置することが去年から法律で義務づけられましたが対応が遅れていることから、24日夜、東京の弁護士が集会を開き、虐待について速やかに調べるには、弁護士の配置が必要だと訴えました。

去年10月から原則として児童相談所に弁護士を配置することが法律で義務づけられましたが、国が自治体を通じて今年1日時点の状況を聞いたところ、「常勤で配置」と答えたのは全体のおよそ3%、「非常勤で配置」と答えたのはおよそ40%で、多くの自治体は必要に応じて電話をするといった対応を取っています。

こうした状況を受けて、東京弁護士会が24日夜、東京・霞が関で集会を開きました。名古屋市の児童相談所で常勤で働いている橋本佳子弁護士は「弁護士がいれば裁判所の許可を得て、虐待について調べる手続きを速やかに行うことができる」などと意義を強調しました。

一方で、弁護士を雇う費用は税金で賄うことになるため、パネルディスカッションでは「子どもたちのための仕組みづくりとして、議会の理解を得る努力が必要だ」といった意見が出されました。

東京弁護士会の川村百合弁護士は「児童相談所で弁護士の能力を生かすことが、子どもの権利を守るうえで大切だ」と話していました。

職員が企画実行「特命班」

読売新聞 2017年04月25日 岡山

太田市長（右）から特命班の辞令を受け取る吉鶴さん（中央）と赤松さん（真庭市役所で）



◇真庭市 部署越え協力、意欲向上へ

真庭市が、職員提案型事業を募り、提案者を含む「特命班」を設置した。職員の企画力や意欲を高めるのが狙いで、専門外であっても担当部署のサポートを受けながら中心となって事業を実施するという。第1号は市教委事務局の女性職員らが、子どもたちの経済的困窮や虐待の連鎖を断ち切ろうと考えた事業で、今秋の着手を目標

に取り組む。（根本博行）

職員の能力や意識を向上させようと昨年12月、全職員約700人を対象に提案を募集。10組13人から寄せられたプランを幹部5人が審査し、市教委教育総務課主幹の吉鶴尚美さん（46）と議会事務局主幹の赤松ひとみさん（42）が共同提案した「子どもの人生の可能性を応援する事業」を採用した。

提案では、経済的困窮や虐待など子どもの可能性を阻害する要因を「貧困」と定義。小中学校や民生・児童委員、子育て団体、小児科医などへの聞き取り、市役所内での資料収集などで実態を把握し、先進事例を調査し、国や県の施策も生かしながら支援していくという。

2人は公私ともに親しい間柄で、吉鶴さんは昨年、市総合教育大綱を作成する過程で「貧困」への対応が、子どもの人生の応援につながると思い、赤松さんに相談。赤松さんも市議会一般質問で、貧困の実態が把握されていないことを知り、一緒に提案した。

特命班の任期は今年度末まで。総合政策部の馬内雄大部長と総合政策課の上島芳広課長も加わり、4人で事業化に取り組む。通常業務をこなしながら特命に当たるため、関係部署などに協力を求めているという。早ければ半年ほどで実施内容を決め、9月市議会での補正予算計上を目指す。

辞令交付式は20日、市役所で行われ、太田昇市長は「市民も巻き込みながら、将来を担う子どもたちの『負の連鎖』を解消してほしい」と期待。2人は「子どもたちが将来、『真庭に生まれて良かった』と思える施策を構築したい」と意欲を見せている。



研究者の夢へ前進 異才発掘プロジェクトに甲斐さん参加

大分合同新聞 2017年4月24日

自宅で飼うコーンスネークをなでる甲斐潤樹さん＝大分市

突出した能力を持つ子どもたちの可能性を広げようと、東京大学先端科学技術研究センターなどが手掛ける異才発掘プロジェクトに、県内から大分市高城新町の中学1年、甲斐潤樹（みつき）さん（12）がただ一人、参加している。学校にはなじめないが、特定分野への学習意欲がある小中学生たちが対象で、甲斐さんは動物の生態に興味を深める。研究者になることを夢見て、フィールドワークなどに励んでいる。

「ROCKET（ロケット）」と名付けられたプロジェクトは、同センターと日本財団が2014年12月から始めた。特異な才能があるのに、不登校など学校で勉強することが困難な子どもを全国から選抜し、学習の場を提供している。

ロボットクリエイターや起業家といった各分野の先駆者たちによる講義、インターネットを利用した個別指導などを実施。必要であれば電子顕微鏡や学術性が高い図鑑などを提供し、海外研修もできる。

甲斐さんは小学4年のころから参加している1期生。発達障害があり、文字を書くのが苦手。聴覚過敏のためノイズを除去するヘッドホンも手放せず、毎日小学校に通うのが難しかった。一方で、幼少期からクジラの図鑑を母親に読んでもらったり、水族館へ頻繁に通うなど動物への興味は尽きなかった。

ロケットには「学校に行けない自分が嫌で申し込んだ」。初年度は毎月1回、数日上京して、講義や畑作り、料理などの活動に参加した。現在は興味を深めた「生命科学」プログラムに加わり、パソコンのやりとりで学んでいる。1月には食物連鎖の研修の一環として、宮城県石巻市で漁師体験をした。

自宅ではオオイタサンショウウオやヘビなどを飼育。生き物が好む温度や湿度を調べたり、産卵時期、環境による成長具合の違いなどを研究している。高尾山に出掛けてフィールドワークをすることも。将来は離島でハブの研究をしたいという。

甲斐さんは「プロジェクトに参加したことで前向きになれ、自分を認めることができた。自分なりのやり方で研究者になる目標を実現させたい」と意気込んでいる。

メモ：プロジェクトは小学3年～中学3年を対象。毎年、全国から500～600人が応募している。1期生には15人、2期生13人、3期生31人が選抜された。数学、物理、歴史、絵画、プログラミングなどに興味を持つ子どもたちが集まっている。現在、全国で説明会を開き、6月から4期生の募集を始める。問い合わせはロケット事務局（TEL 03・5452・5064）へ。

発達障害と生きるピアニスト・野田あすかさん 大阪で初公演「みんなの力になりたい」

産経新聞 2017年4月24日

大阪公演の前に「人の心の力になりたい」と話す野田あすかさん
＝大阪市中央区



いじめや不登校、退学、そしてリストカット…。22歳まで発達障害と分からず、葛藤と苦悩の日々を送り続けてきた宮崎在住のピアニスト、野田あすかさん（35）の大阪での初リサイタルが30日、大阪市中央区の「いずみホール」で開かれる。試練を乗り越えてきたからこそ奏でられる優しく伸びやかな音色はテレビでも感動を

呼んだ。野田さんは公演の前に、「人の心の力になりたい」と話している。（小泉一敏）

幼いころから相手の気持ちや場の空気が読めず、言葉をそのままの意でしか受け取れなかった。自分の興味のあることは長時間没頭できるが、他人の表情やしぐさの意味も分からない。

両親はちょっと変わった個性だと見守ってくれたが、どうして周りの人とうまくいかないのか悩み続けてきた。小学校のとき、教師から三角食べをするよう指導されると、ご飯、みそ汁、おかずを、ひと口ずつ食べては箸を置き、また食べ始めるということを忠実に繰り返し、「食べるのが遅すぎる」と注意された。

チャイムを守ることも理解できなかった。草取りの時間では、終業のチャイムが鳴っても1人だけ目の前の草がなくなるまで続けようと、「ルールを知らない自分が悪い」と責めた。

中学で父が単身赴任するなど環境が変わると、ストレスからパニックに陥り、自傷行為が目立つように。高校ではいじめに遭い人が怖くなった。「だったら見えなくなればいい」と目をドアに打ちつけた。不登校になり、転校を余儀なくされた。

そんな日常を唯一癒やしてくれたのが4歳で始めたピアノだった。「音を通じて自分の心

を教えてくれるピアノは、私の心の中にある私そのもの」と語る。

音楽教師になろうと宮崎大に入学してからも試練は続いた。人間関係のストレスは解消されず、再びパニックを起こして自宅2階から飛び降り、右足を骨折。ピアノが原因と疑われ、鉄格子で窓が覆われた精神病棟への入院を強いられる。半年間ピアノから遠ざかる絶望も味わった挙げ句、退学を余儀なくされた。

だが、再び人生に光をもたらしたのもピアノだった。「やっぱり弾きたい」と両親に訴え、入り直した宮崎学園短期大で、ありのままの存在を認めてくれる恩師と運命の出会いを果たす。

演奏に自分らしさが出ることへのためらいがあったが、恩師は「あなたの音はとてもすてき。あなたはあなたのままでいいのよ」と背中を押してくれた。

自らの状態が分かったことも大きかった。ウィーン国立大学に短期留学中、パニックを起こして搬送された病院で「発達障害」と診断された。それまで野田さんを苦しめてきたコミュニケーション能力の欠如が生まれつきの障害だったことに、22歳にして初めて気付いた。「長年解けなかった謎が解けたみたいで、正直ほっとした」と振り返る。

それ以降、周囲も感じるほど音が変わった。「心の音になったんだと思います」と野田さん。平成18年の宮日音楽コンクールでグランプリ、21年のローゼンストック国際ピアノコンクールで奨励賞を受賞したほか、数々の賞に輝いた。

昨秋、プロデビューも果たした。「どこか懐かしい気持ちになりました」「1曲目から涙がこぼれました」。東京でのリサイタルは好評を得たという。NHKや民放のテレビ番組でも取り上げられ、その優しい音色が話題になった。

今月の大阪公演ではオリジナル曲も披露する。「障害に関係なく、多くの人が悩みを抱える。演奏を通じ『頑張ろう』と思えるように人の心の力になりたい」。自信に満ちた笑顔で浮かべた。

大阪公演は30日午後1時半開演。問い合わせはリバティ・コンサーツ（(電) 06・7732・8771）。



陶器や苔玉など600点 宇和島で福祉事業所作品展

愛媛新聞 2017年4月25日
約600点の品々が並ぶ「八つ鹿工房」の作品展

愛媛県の宇和島市役所で24日、多機能型障害福祉サービス事業所「八つ鹿工房」（同市和霊元町2丁目）の作品展「ぬくもりの陶器と癒やしの苔（こけ）玉展」が始まった。28日まで。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行